

第68回山口西田読書會（2015年3月7日）

担当：田中

前回（2015年2月28日）のプロトコル（田中）

出席者：佐野、長谷川、千葉、植田、桑原、藤村、岡部、杉山、来栖、岡田、萬納寺、山口田中（13名）

テキスト：西田幾多郎『善の研究』

1. 萬納寺氏のプロトコルの検討

II-9-1の（註）の位置づけ

西田哲学ではなく、唯心論の立場からの記述

人と人は、コミュニケーション可能なのか

西田：人の意識は共通→それゆえに根源的には通じ合っている

→しかし、矛盾衝突により、分離していく

哲学的問いにかかわって

無限の衝突と無限の統一、苦悶と平静心との関係

この問いに関して、第2編第9章第7段落を読んだ

第2編第9章第7段落

人心の苦楽（苦痛と快樂）

我々の精神が

完全の状態（＝統一の状態）→快樂

不完全の状態（＝分裂の状態）→苦痛

精神→実在の統一作用 統一の裏面→矛盾衝突→常に苦痛

無限なる統一的活動→矛盾衝突を脱し→いっそう大なる統一をめざす→種々の欲望、理想を生じる

いっそう大なる統一に到達＝欲望、理想の満足→快樂

快樂の一面→苦痛あり 苦痛の一面→快樂あり

人心 絶対に快樂に達することはできない ∴) 一面に必ず苦痛を伴う

努めて客観的、自然と一致するとき→無限の幸福を保つことはできる

（註）心理学者の説明→西田の説明と同じ

我々の生活を助くる者→快樂 生活を妨ぐる者→苦痛

生活→生物の本性の発展＝自己の統一の維持

【快樂→我々の生物の本性の発展（自己の統一の維持）を助くる者】

精神→実在の統一作用 大なる精神→自然と一致

小なる自己を以て自己となすとき→苦痛多い

自己が大きくなり客観的自然と一致→幸福となる

\*「統一」→「生きるため」ではない。それは、統一からの結果にすぎない、と西田はいつている（佐野） c f 「我々は、自己の安心のために宗教を求めるのではない。安心は、宗教より来る結果である（IV-1-2）」

幸福と快樂との関係について、第3編第9章第3段落を読んだ

第3編第9章【善（活動説）】第3段落

道德家 善の本性→自己の要求を抑圧、活動を束縛

いっそう大なる要求を攀援<sup>はんえん</sup>（求める）すべき者→小なる要求を抑制する必要  
徒らに要求を抑制すること→反って善の本性に悖（もと）った（背いた）もの  
道德の義務、法則→義務法則そのものに価値があるわけではない

大なる要求にもとづいて起こる

善＝幸福（アリストテレース）

自己の要求を充たす、理想を実現する→いつでも幸福

善の裏面→幸福の感情を伴うの要（「伴う必要」という意味？）がある

快樂説 意志は快樂の感情を目的とする者 快樂すなわち善ではない

快樂と幸福→似て非なるもの

幸福→満足によりて得られる

満足→理想的要求の実現によって起こる

【幸福→理想的要求の実現によって起こった者によって得られる】

苦痛の中においても幸福を保てる（孔子の言）

真正の幸福→厳粛なる理想の実現によって得られる

世人：自己の理想の実現、要求の満足→利己主義、我儘主義

西田：もっとも深い自己の内面的要求の声

→我々にとって大なる威力を有し、人生において、最も厳か（おごそか）なるもの

活動説に関わって～佐野先生より

「湯田温泉まで歩く」という行為をどうとらえるか

①「歩く」行為を運動として考える立場

歩く速度、歩き方などが問題とされる

②「歩く」行為それ自体を考える立場

歩くことを、魂の活動と考える→活動説

道徳と宗教にかかわって

西田先生の「倫理学草案」（善の研究第3章執筆の一年前の執筆）

人が、道徳を追及していけば、そこに矛盾を生じさせ、それを解決させるために、人は、宗教を求めるようになる

善の研究

このような思考にはなっていない。

第4編 宗教 第1章 第1段落

宗教的要求は、自己に対する要求である。自己の生命についての要求である。

この違いをどう考えたらいいのか、という問題提起がなされた

2. 前回に続いて、第2編第9章を読み進めた

#### II-9-4

我々の精神とは実在の統一作用であるとして見る（II-9-2）と

実在→すべて統一がある

実在→すべて精神がある

無生物と生物 精神のある者と無いもの→区別の基準は？

一本の樹

客観的実在として→自然力によって成立する物

意識現象の一体系→意識の統一作用によって成立する

無心物→統一的自己→直接経験の事実としては現実化していない

樹其の物→自己の統一作用を自覚していない

統一的自己→樹其の物の中にはない（他の意識の中にいる）

樹其の物→外面より統一せられた者、内面的統一はない→独立自全の実在とは言えない

動物（樹との違い）～植物と動物との違い

内面的統一（自己）が現実には現れている

動物の形態動作（諸現象）→内面的統一の発表

実在→精神に於いて始めて完全なる実在となる→独立自全の実在となる

cf II-8-4 （眞の自己は精神に至って始めて現はれる）

「精神」は何の精神か？→「人」の精神 「眞の自己」→「眞の実在」

註) 精神なき者 (人間以外の者)

自己はある→統一はある→しかし、それは、外から (人から) 与えられたもので、内面的統一ではない。→見る人によって変わる

樹 (精神はない)

(一般の人から見れば樹であっても) 化学者の眼→一つの有機的化合物 元素の集合→ (一般的にいわれるところの「樹」という実在はない、ともいえる)

動物 (精神がある)

動物の精神そのものは、(内面的統一をしているから) 見る人が勝手に変えることはできない。とにかく、事実上動かすべからざる一つの統一を現わしている。

#### 【哲学的問い】

1. II-9-4では、精神の有無を客体の違いから説明している。

樹、動物など

しかし、むしろ精神のある者、ないものという区別ではなく、問われているのは、人間の精神がどの程度発展しているか、ではないか。

自然と一致できるほどの「大なる精神」に到達 (II-9-7註) しているか、どうか問われているのではないか? 樹と対話できる人もいる

2. なぜ、快楽は得られないのか? 苦痛はあるにしても、統一の瞬間はあるのではないか、それを快楽とってはいけないのか? 統一の破れた瞬間が快楽なのか? それは、精神が死せる段階 (IV-1-3) なのか?